様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２４１７

研究課題名（和文）自筆資料調査および実地踏査による森敦文学の総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive study of MORI Atsushi's literature by self-written data survey and field survey

研究代表者
井上　明芳（INOUE, Akiyoshi）

國學院大學・文学部・教授

研究者番号：９０６１４２６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　森敦文学について、代表作「われ逝くもののごとく」を中心に自筆資料を翻刻し、生成過程を明るみにした。同時に、本作品の舞台である山形県庄内地方の現地調査を行い、現地というリアリティから小説作品としてのフィクションを見出した。その際、現地の風習や方言などもあわせて調査し、作品の註釈とした。これにより、「われ逝くもののごとく」を庄内地方の文化資源として位置づけることができるとともに、本作品の読解を地理的に、註釈的に行うことを可能にしている。また、作品舞台の地図を描くこともできたが、それは単に文学マップを作るのではなく、森敦の文学理論「意味の変容」に基づくことであり、森敦文学の理論的構築を示し得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　森敦文学の自筆資料の調査および翻刻という基礎的な研究は、従来成されてこなかったため、本研究が初公開となる。この成果によって森敦文学の研究の発展に寄与できるであろう。
　また、同時に行った現地調査は、文学研究の方法としては基礎的であるが、庄内地方という地域の調査によって、森敦文学を文化資源として位置づけることを可能にした。文学研究と地域振興の融合を示すことで、文学研究の基礎的な充実とともに、いわゆる「ふるさと」細見にもなっている。

研究成果の概要（英文）：As for Mori Atsushi literature, I reprinted the autograph data focusing on the representative work "I like what I like" and made the process of creation brighter. At the same time, he conducted a field survey of the Shonai district in Yamagata Prefecture, which is the setting of this work, and found fiction as a novel from the reality of the location. At that time, the local customs and dialects were also investigated, and it was decided that the work was annotated. As a result, it is possible to position "Like Me" as a cultural resource of the Shonai region, and to make it possible to interpret this work geographically and explanatoryly. In addition, although it was possible to draw a map of the work stage, it is not merely making a literary map,but based on Mori Atsushi's literary theory "Transformation of meaning", and could show the theoretical construction of Mori Atsushi's literature.

研究分野：近現代文学

キーワード：森敦　自筆資料　現地調査　翻刻

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、森敦研究の基礎的な基盤を形成することを目的としている。その学術的背景として、森富子氏の全面的なご理解とご協力により『森敦資料集』を刊行している。本書は森敦の自筆原稿、草稿、ノート、メモなど、基礎的な資料について調査し、一覧化したものになっている。それによって森敦文学の成立状況を知ることができる。ただし、資料の存在および種類はわかっても、その内容はいまだ公開に到っていない。以上に基づき、本研究は森敦の基礎的な資料の翻刻を行い、広く公開することで、森敦研究に寄与することができる。

２．研究の目的

本研究の目的は森敦の自筆資料の翻刻を行い、研究の基礎的な基盤の形成を目的とした。とりわけ、森敦の代表作であり、晩年の大作「われ逝くもののごとく」については、芥川賞受賞作「月山」と並び、その重要性は明らかである。にもかかわらず、自筆資料の調査は皆無であった。そこで本研究は、その重要性に鑑み、「われ逝くもののごとく」の自筆資料を精査し、本作品の生成過程を明らかにする。その上で、翻刻を行い、生成過程の内実について公開し、「われ逝くもののごとく」の生成過程を具体的に示す。

さらに、「われ逝くもののごとく」が山形県庄内地方を舞台としていることから、現地を調査し、物語舞台としての意味を見出すことも目的とした。原則的に小説作品はフィクションであるため、現実の舞台を知らなくても読むことはできる。しかし、現実の舞台を知り、その知見を合わせることで、「われ逝くもののごとく」のフィクション性と現実性（リアリティ）を見出すことができる。これは森敦文学の理論「意味の変容」の内部＋境界＋外部＝全体概念という定義を明らかにすることに通じている。フィクション／リアリティを「われ逝くもののごとく」に見出すことで、生成過程の面だけではなく、理論的な面も明らかにできる。

さらに、現地での調査、取材によって庄内地方ならではの独自の意味が見出し得る。それは方言や風習だけではなく、地理や土地柄など、いわば地方性を検証することとなる。したがって、「われ逝くもののごとく」は庄内地方にとっての文化資源ともなり得る可能性を有している。たんなる読解や印象だけではなく、上述した生成過程や理論を明らかする学術的な方法に基づきながら、文化資源としての可能性を見出す。

以上の成果を最終的に、「森敦文学研究の世界」というサイトを開設し、インターネットを通じて広く公開する。

３．研究の方法

本研究の方法としては、研究会を組織し、学部生や大学院生とともに、「われ逝くもののごとく」の生成過程の精査、翻刻を行う。学部生や大学院生にとって自筆資料の検証は極めて貴重な経験であり、教育的に意味がある。得られる成果をみなで検討し、「われ逝くもののごとく」の生成の段階に応じて変化していく内容を読み取っていく。そのためには、「意味の変容」理論の詳細な読解も必要となる。

以上の研究を踏まえて、夏期休暇などを利用し、山形県庄内地方の調査に赴く。フィールドワークを行うことで、知識としては得ていたものを実際に体験することとなる。この実感を「われ逝くもののごとく」研究にフィードバックすることで、さらに読解を深めていく。そのために、註釈を作成する。さらに、フィールドワークで得られる地理的な把握によって地図を作成したり、映像によって物語の風景を構成したりして、「われ逝くもののごとく」を視覚的に捉えられるようにする。

これらの知見について、森敦研究会を研究会を開催し、公開する。その際、森富子氏をお招きし、「われ逝くもののごとく」の執筆時について講演いただく。また、森敦研究を行っている研究者をお招きし、本研究の成果を中心に検討するシンポジウムを行う。

以上の内容をさらに研究会で再検討し、成果として「森敦文学研究の世界」というサイトを開設し、広く公開することで、森敦研究への寄与、並びに庄内地方への関心へとつなげていく。

４．研究成果

(1)「われ逝くもののごとく」の自筆資料の精査、翻刻の成果

「われ逝くもののごとく」の自筆資料は、全部で７種類に及んでいる。生成過程の順に挙げると、最初に書かれた草稿、その複写にさらに修正を加えている草稿、初出「群像」連載のための草稿がある。さらに単行本化するにあたり、初出「群像」の複写への修正稿、単行本ゲラの初校、二稿、念校がある。現在読むことができる「われ逝くもののごとく」本文はこの７段階の生成の過程を経ている。この全文を翻刻して公開することは、著作権に抵触するため回避し、あくまでも加筆訂正などの異同が生じている部分のみを公開することとした。句読点のみの異同があっても公開している。この精査、翻刻を通じて、「われ逝くもののごとく」が、前に書いた草稿の内容を次段階で削除しても、なお想起させるものとなっていることが見出し得た。それは当然削除されているため読めない内容ではある。したがって想起させるもののそれが何かは捉えがたくなっており、一種の謎として残り続けることとなる。見方を換えれば、その謎として残ることで、すでに一度語られた内容があったという事実を示している。それは今は捉えることができない物語の痕跡と考えることができ、いわば物語の歴史性として見ることができるであろう。それが生成過程の精査、翻刻による重要な成果である。

(2)作品舞台としての庄内地方の調査の成果

「われ逝くもののごとく」の舞台である山形県庄内地方の現地調査は、物語の起点である加茂地区からはじめた。加茂地区は、登場するサキ一家が暮らしており、彼等の行動を現地にあわせて検証した。。また「上海」と呼ばれる人物のモデルとされる秋野庸太郎氏の自宅なども調査した。とりわけ、サキのじさまにとって重要な加茂坂トンネルに向かう途中の「赤い鳥居のある祠」の実在をつきとめ、物語の内容との一致と不一致を確認した。これはフィクションとリアリティの問題として、「意味の変容」理論に照らし合わせて考察することが可能となった。また、登場する北限の吹浦の地にも赴き、物語内の生／死が顕現する地として確認することができた。さらには物語の最終場面となる十二滝や「月山」では主要な十王峠が本作では点景に過ぎなくなっていることなどを確認した。

これらは、デジタルカメラによる撮影の他、天球型に撮影できるカメラ、動画など、考えられる手法で撮影した。それは、現地調査という実際に物語の舞台や風景に身体が臨む体験それ自体を成果として残す方法を模索することになった。その表現方法として森敦研究会で立体地図を用いたプロジェクション・マッピングなどを披露し、文学研究の成果報告の提言とした。

さらに、現地調査から得られた知見を註釈として作成し、「われ逝くもののごとく」の読解に寄与することを目指した。

以上の(1)(2)を合わせて、森敦研究会を開催し、成果報告を行った。その際、森富子氏の講演と中村三春北海道大学大学院教授、黒田大河大阪樟蔭女子大学教授、塚田修二東京都市大学・大妻女子大学非常勤講師をお招きし、シンポジウムを行い、森敦研究にあって本研究の意義を検証した。研究会開催は以下の通りである。開催場所はすべて國學院大學である。

第１回森敦研究会　テーマ　〈わたし〉が語る（平成 28 年 12 月 17 日（土））

第２回森敦研究会　テーマ　物語を〈体験〉する（平成 29 年 12 月 9 日（土））

第３回森敦研究会　テーマ　言葉に〈ふれる〉（平成 30 年 12 月 15 日（土））

以上３回の研究会で得られた知見や課題を、研究会で検討し、最終的な成果として web サイトを國學院大學の協力を得て、大学 URL のサブディレクトリに開設した。テーマは「生成過程」「作品風景」「物語地図」「語句註釈」である。これに加えて上記の成果の記録とある「活動報告」で成り立っている。自筆資料の精査、翻刻を中心に、現地調査の取材で得られた映像やプロジェクション・マッピングなども掲載し、森敦文学研究を多角的な視点で捉えられるようにした。

この取り組みによって、html 形式による表現には、研究成果の表現方法自体を広げる可能性が実感された。従来の書籍等による報告とは違って、小説作品を読解しながら、舞台である現地をも体験できるといった可能性は、デジタル技法が可能にするであろう。したがって、このサイトは業者に発注することはせず、稚拙であってもその可能性についての知見を得るべく、自らで作成した。本サイト「森敦文学研究の世界」の URL は下記項目に記してある通りである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

① 井上 明芳、森敦文学のレファレンス機能―小説・エッセイ・年譜の相関関係、國學院雑誌、査読有、第 120 巻第 2 号、2019、35-51

② 井上 明芳、表象される吹浦―森敦「意味の変容」を機能させる地―、解釈、査読有、第 65 巻第 1・2 号、2019、25-34

③ 井上 明芳、森敦「われ逝くもののごとく」の特性―物語を語り、体験する―、解釈、査読有、第 64 巻第 1・２号、2018、39-47

④ 井上 明芳、森敦「鳥海山」論―読みがたさの生成―、解釈、査読有、第 63 巻第 1・2 号、2017、39-47

〔学会発表〕（計　　件）

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
https://www2.kokugakuin.ac.jp/i_wrks/

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。